

## 謝辞

このセミナーにご協力いただき、公開に了承いただいた講師の皆様にお礼を申し上げます。

なお、このセミナーは学術振興会科学研究費補助金 (Kakenhi:20H01408) の助成によって実施できました。ここに謝意を記します。

## お断り

この動画および文字起こしは、このテーマへの関心をもっていただき、理解していただくために公開しております。

動画を授業やセミナー等でご利用いただきたいと思います。動画やそれを写真にしたものを他の媒体に掲載するなどの2次利用はお辞めください。

また、文字起こしの文章は一部であっても、無断での引用、転載、二次利用はご遠慮ください。引用等でのご利用を希望される場合には、必ずご連絡ください。

出典の明示の仕方および、引用部分がわかるようにして引用等していただけるように相談させていただきます。

お問合せは [tsuge@soc.meijigakuin.ac.jp](mailto:tsuge@soc.meijigakuin.ac.jp) までどうぞ。メールの件名に【引用相談】と入れてください。

1週間ほどの余裕をもってご連絡ください。返信がない場合には恐れ入りますが、再送をお願いします。

柘植：こんにちは明治学院大学の社会学部の柘植あづみ(つげあづみ)といます。私たちは科学研究費補助金の補助を得て、生殖医療技術の利用における選択というテーマで調査研究をしています。その一環として公開セミナーを開いています。まず私たちの研究メンバーをご紹介します。洪さんどうぞ。

洪：洪(ほん)と申します。明治学院大学社会学部付属研究所で研究員をしております。専門は文化人類学、生命倫理です。どうぞよろしくお願いいたします。

柘植：小門さんどうぞ。

小門：ありがとうございます。神戸薬科大学 薬学部の小門穂(こかどみのり)と申します。生命倫理、医療倫理を専門にしています。よろしくお願いいたします。

柘植：本日は城西国際大学 看護学部の教員で、すまいる親の会の清水清美さんを講師に招いています。テーマは精子提供で親になった人の思いというお話をしていただきます。清水さん、どうぞよろしくお願いいたします。

清水：よろしくお願いいたします。では、まず画面を共有させていただきます。清水清美(しみずきよみ)と申します。まず私がすまいる親の会を結成した経緯、あるいはこのすまいるに関わるようになった経緯を少し皆さんにお話させていただきます。まず2000年、私が研究者として男性不妊、特にAIDを選択するカップルの現状の調査を実施しました。当時提供精子に関する情報は全くなく語っていただく方に協力をいただくこともとても大変でしたが、34名の女性に協力を得て実施しました。調査の内容は男性不妊と分かった時の気持ち、提供精子を選択するまでの葛藤、夫婦の話し合い、そして治療、出産、子育てに至る過程でのエピソードをお聞きしながら、その時々のお気持ちを聞きました。その過程で女性たちは医療者からの少ない情報でこの治療を選択し、支援者や理解者がほとんどいない中で子育てをしていることが分かりました。中には子どもに事実を伝えていないが故に、子どもに嘘をついてはいけませんと言いながら、自身が嘘の上塗りをしていることをとても苦しく感じてらっしゃる方もいました。現在、子どもの出自を知る権利について多くの方が知るようになりましたが、当時はこの事実を他の家族や子どもには言わない方がいいという医療者からのインフォメーションもあり、告知を考えているカップル、あるいは女性たちは、1割程度でした。しかし、この伝えないという理由には、事実を知ることによって子どもが傷つくのではないかと、あるいは家族や親子が崩壊してしまうんじゃないかという、とてもそれを不安に思うが故に、そのような選択をされていることが分かり、決して子どもを搾取しようという思いでそこに至ってるわけではないということも分かりました。その後、調査に協力いただいた方と繋がり、当事者が安心して話せる場が欲しいと依頼され、世話会のような形で数人集まる会を開催するようになりました。また同じ頃、AIDで生まれて大人になってからその事実を知った人たちがアイデンティティのクライシスを体験し、自身の根源に関わる大切な事実を隠してきた親や秘密にすることを伝えてきた医療者に対し、不信感や怒

りを感じているということを知りました。親が生まれたこと、幼い頃からこの事実を共有する Telling というのですが、その重要性についても知りました。そして現状では、親は告知したくない、子は告知してほしいという対立構造が作り出されていることも知りました。そこで親になって初めて Telling された生まれた人たちの思いとか、あるいは AID を選択してもその後も様々な課題があること、それが Telling をしてないということで引き起こされるというようなことを AID を検討している段階で知っておく、不妊に悩むカップルが AID を検討している段階で知っておくということが大切だと思い、勉強会スタイルを導入することにしました。また、会の名前もすまいる親の会とし、私が事務局を担当することになりました。すまいるという会の名前は、無精子症という苦しい状況の中でも会に参加することで、少しでも笑顔になれるといいね、という初代の代表が考えました。今回はみんな AID をやろうねという会ではありません。AID についてきちんと勉強したうえで、AID が自分たち夫婦にとって最善の選択なのかじっくり考えてもらったり、よりよい家族を作っていくためにはどうしたらいいか、お互いの考えを出し合う会として発展しました。

現在、すまいる親の会とは精子提供で親になることを検討している、親になった人の自助グループということで主な目的は、精子提供に関する情報提供、当事者が情報交換できる場の提供としています。主な活動は二つで、勉強会開催ということで提供精子を検討しているカップルへの情報提供、あるいは当事者同士の交流を目的としたものを年に 2 回、キッズ会といって、これは提供精子で家族になった親子の集いということで年に 1 回開催しています。

少なくとも不妊カップルたち自身と生まれてくる子の身体的・心理的・社会的リスクを最小限にするということ、あるいは親が選択した生き方に自信が持てるようにするということ、そして先ほどの子どもの知る権利と親のプライバシーが対立するのというのではなく、子の幸せがイコール親の幸せになるように、生まれた子どもが生まれてよかったと思えるように、そんなことを目指した会になるように頑張っています。

主にこの会に参加される方の背景はいろいろです。不妊原因ということでは原因は分からないけど無精子症と言うような方が多いのですが、他には手術とか事故で、あるいは病気で生殖を切り捨ててしまったとか、あるいは生殖能力はあるけれども、遺伝疾患があるので自身の精子を使えないとか、あるいは性同一障害があるカップルが来られています。また、不妊治療の段階もほんとうにまだ無精子症と分かったばかりの方だったり、AID に踏み切るかどうか今考えているという方、あるいは、もうすでに AID に進むということは決めてい

るけれども治療の土台にも乗っているけれども、なかなか妊娠しないという方、あるいは現在妊娠してますという方が来られています。

勉強会も最初からこのような内容ではなく、いろいろなことを試しながら試しながら、最終的に今ここに落ち着いている内容です。1日ばかりで行いますが、まず一つは日本の AID 事情について医療職の方から話しています。法的な情報だとか親子法、判例等、日本での現状です。それから現状だとか、あるいは医療情報ですね。妊娠率、費用、手続き、手順、ドナー情報、あるいは心理社会的な情報としては治療の決定から出産後育児期にあたるうえでの直面する課題等あるいは AID 児に課す重圧、あるいは告知を妨げる因子、あるいは夫婦関係の影響などお話しています。また AID で親になった人の体験ということで、少し先行く人たち AID を選択したカップルがどのように自分たちの子に向き合って、パートナーと話してそして、治療そして出産、子育て期においてどんなことを体験しているのかというようなお話をさせていただいています。それから、また AID で生まれた人からの立場で自分たちが今体験されていること、悩みだとか親子関係における課題等のお話をさせていただいています。それからもう 1 つ、無精子症のカップルでも AID でなく、養子縁組で親になることも可能性としてはあります。ですので、養子縁組で親になった方の体験も話させていただいています。なかなか養子縁組というのはハードルが高いと思われる方もいますけども、どんな風に手続きをされたのかとか、どんな風に子どもと出会って今どんな風に家族を作っているのか、そんなような話もいただいています。その他にフリートークでそれぞれ男性、女性でそれぞれ輪になって AID で親になった方たちにファシリテーターになってもらって自由に討論してもらっているという時間も設けています。なるべく主催者は AID が良いですよとも悪いですよとも言うのではなく、中立的な立場でとにかく参加者が安心して参加できるようにそれから、自由に話せるように当事者主体でこの会が運営できるように配慮して行っています。

最初から私たちも情報があるわけではありませので、本当にいろいろなところから情報をもらいながら勉強会を進めてきました。これは生まれた人が書かれた著書なんですけれども、こういう著書から学んだことも勉強会に利用させていただいたり、これはドイツの教材なんですけれども、ドイツで提供精子で生まれた子どもに対して、小さい子どもに対してこれは絵本なんですけど、あなたはどんな風に生まれたんだよというお話の絵本です。これは 4 冊ありますけれども、この黄色の方は提供精子というより夫婦間の体外受精で生まれたお子さんへのお話です。体外受精でもなかなかお話ができないというのは日本でもあるかなと思うんですけど、それを子どもに分かりやすく説明した本です。

これはドイツの教材なのですが、4冊絵本があります。1冊はですね、これ全て小さい子どもに伝えていくための本なんですけど、この黄色い本だけは夫婦間で体外受精をしたときのことを子どもに伝えるための絵本です。なかなか日本でも体外受精であなたは生まれたのよというのは、なかなかお話する機会もないし、する必要もなかなか感じてない方もいらっしゃるかもしれませんが、子どもにとっては自分がどんな風に生まれたのかを自然に知るといってとても大切な教材なのかなって思っています。それから、他の3つは全て提供精子で生まれたお子さんが、特に小さいお子さんが自分の生まれを理解するために作られた絵本なんですけど、みなさんの向かって右下ですね。こちらはシングルの女性が提供精子を受けてお母さんになって、あなたが生まれたのよという話になります。それからあと左側の方の上のほうですね。女性2人の絵が描いてあって、レインボーの虹の絵が描いてありますけれども、これはレズビアンのカップルがママになって、そして、生まれたお子さんにお話をする絵本です。それからその下は、ヘテロカップルですね。男性女性のカップル間での第三者からの精子提供を受けてお父さんお母さんになった。そして、あなたが来てくれたのよという、そういうお話になります。本当にかわいい絵でとてもお話しがしやすいし、子どももとても喜んで読む絵本だという風にお聞きしています。

また、こちらはイギリスの教材なんですけれども、子どもに伝えるときの年齢がそれぞれ違うと、やはりその話し方というのも違って話さないといけない。例えば小さいうちであれば難しい言葉じゃなくって、そして本当にあなたに会いたくてお父さんとお母さんは治療したのよ、というような話でもいいと思うんですけど、やはりかなり年齢がいったあとにこの話をする場合には、今までどうしては話さなかったのかっていうこともお子さんが納得するように話していかないといいけないということで、そのお子様の年齢に応じた話し方ということで、これは Telling&Talking という冊子なんですけども出ています。これは才村眞理さん、この前皆さんここで同じように公演されたっていうことをお聞きしたんですけども、その先生がおつくりになって日本でも翻訳している本でもあります。

このような教材を少しずつ勉強しながら私たちの会もほとんど情報がない中でもみなさんが体験を話してくれたりとか、それからそれをまとめたりとかそれから海外の教材を土台に翻訳したりとかっていうことで、左の方は AID を初めて考えるカップルへの情報提供資料ですし、向かって右の方は小さいお子さんに伝えていくための絵本も作っています。

では、少し私たちの会に来た人たちがどんな気持ちで参加して、そしてどんな気持ちになっているのかっていうことを少しご紹介したく、近々に調査したデータをお見せしながらご説明したいと思います。参加された方なんですけど男性が27名ですね。この方たちにアンケート

ート調査をしました。参加の動機なんですけれども、このカッコに書いてあるのは人数です。ですから男性は 27 名中、赤は女性ですね、ですから 28 名中、23 名の女性がこう答えているって思って下さい。黒の方は男性が 27 名中、23 名がこう答えているっていう風に理解いただけたらと思うんですけど、多い順にご紹介すると参加の動機は「親になった人の体験を知りたい」、それから「生まれた人の体験を知りたい」、あるいは「同じ体験をした人の意見を聞きたい」、「AID 情報を知りたい」、「子どもの出自を知る権利について知りたい」、「パートナーに誘われてきた」、というようなことがあります。この最後の「パートナーに誘われてきた」は男性だけが答えているんですけど、7 名ですね。だいたいこれだと、4 人に 1 人でしょうかね。4 人に 1 人は自主的というよりは奥様にちよっとう連れられて来たというようなことを言われています。

そして、来た時に皆さんはどんな迷いとか抵抗がありますかというところで、実際には勉強会の前ですけれどもね、気持ちをお聞きすると、「周囲にどこまで話すとか秘密にするか」ということが悩みの種だとか、あるいは「子どもへの告知の心配」、「他人の精子を用いる抵抗」、あるいは「生まれてくる子の容姿」がどんな容姿なのかという心配、「家族としてうまくやっていけるか」、あるいは「夫は生まれた子に愛情を注ぐことができるかへの不安」、これは女性ですけど 11 人ですね、「遺伝や病気・障害への心配」、あるいは「生まれた子がドナーを知ることができない罪悪感」、あるいは「この事実が子どもに分かってしまう懸念」などが言われています。「生まれた子がドナーを知ることができない罪悪感」、というのは日本でずっと今までやってきた AID というのは第三社の精子提供を使うということが基本になってましたので、ここで回答していただいた参加者の方はほとんど、第三者の精子を使うという条件化の中で、治療していた方たちだったものですから、このような回答があったという風に思われます。

これはあと人数じゃなくて箇条書きで書いてもらったものなんですけど、勉強会に参加してどうでしたか、というようなご意見をいただいています。「夫の目線、妻の目線、男性の考え方、女性の考え方を聞くことができた」、「AID を自分なりに理解することができた」、「多くの疑問の部分を解消することができた」、「今回の勉強会で海外での選択肢が新たに加わった」など AID の情報が広がった、あるいは新しく付け加わったというようなこと、それから、「同じ無精子症の人に会え話ができたことがうれしかった」、「一人じゃないことを実感し心が軽くなった」。ほとんど会場に来られて第一声が、「こんなにいるんですか」っていうようなことを言われる方たちが多いのですが、やはり、それまでがほとんどお一人で、あるいはカップルだけで考えてきたというようなところで、同じ状況の人たちがこんなにいるんだということはかなり孤独感というものを軽減させるんだなっていう風に思われま

した。それから、「夫婦で共通の理解を持つよい機会になった」、「今後取り組むことがまだまだ沢山あることに気がつけた」、ということで今後自分たちが何をやっていかなきゃいけないのかあるいは夫婦で共通に学んだので、ご夫婦でご参加いただいていますので、共通に学んだのでそこから自分たちはどうしていこうかというような話に発展するというような感想をいただいています。

これはその時に聞いたんじゃないんですけれども、またあとからメールで感想を届けてくれている人もいて、ちょっと別枠で書かせていただきましたけれども、このような感想もいただいています。「夫婦で話し合うだけではどうしても堂々巡りになる中、いろいろな意見を聞くことで、新たな視野で今後の人生を考えるきっかけになった」、あるいは「私だけが悩んでいる訳ではないと心強い気持ちになった。養子についても選択肢に入れてゆきたい」。あるいは、AID に対する考え方としては、「治療を受けるなら自分自身が納得し、肯定して進んでいかななくては行けないと強く感じた」、「当事者の生の声を聞いてよかった。産むことがゴールではなく、子どもが「生まれてきてよかった」って思ってもらうことがゴールなのだと思えるようになった」。

あるいは子どもとか Telling への考え方なんですけれども、「産まれてすぐは無理としても、できるだけ早く本当のことを伝え、一から信頼関係を作っていくってゆきたい」、あるいは「愛情があるから大丈夫とか、子どもに事実を言わなければわからないとか、それは違うと思う。戸籍にのらない事実だからこそ、親が話す意外に、子どもは自分は誰なのかを知ることができない」、「子どもがありのままの自分自身を受け入れ、ほんとうの自分で生きていけるよう、精一杯応援するのが、親の役目だと思う」、等をいただいています。

そして生まれた子への告知に対する思いというところでは、「告知する」、こういう勉強会があったばかりというところでもありますし、この会に参加するということが自体がもともと積極的な考えを持つ人たちのグループということで、もしかしたらそういうバイアスがあると思うのですが「告知する」といわれた方が 19 名、これは約 7 割くらいでしょうかね、方たちがそのように回答しています。また、「状況に応じて」という方が、女性は 8、男性は 5 ということで、2-3 割でしょうか。「できればしたくない」という方も 1 割程度はいるのですが、このように本当に数年前にたった 1 割告知するという親の考えから随分告知するという考え方が飛躍的に多くなるなっていることが伺われます。

これはクラウセンの母親のエネルギーモデルなんですけど、これを家族形成エネルギーとして置き換えてみました。母親のエネルギーというのが、専門家のケアとそれから家族のサポ

ートをきちんと受けることで母親は子どもに向き合うことができるんですよってこの図なんです、これがある意味、家族形成のエネルギーもやはり専門家の意見と家族とか周囲のサポートというのがきちんとあることで家族がきちんと子どもに向き合える。つまり子どもに対して正直であろうとかちゃんと伝えていこうとか親子関係をきちんと大切にしていきたいとか、そういう風に思っていけるというエネルギーに変わっていくのかなということを考えました。

「すまいるきっず」ですけれども、実際に親になってもそのあとも課題がありあます。やはり周囲の方たちに AID で生まれましたってことを言っていなければ、生まれたばかりからこの子は誰に似てる、似てないという周囲のこれは意図的な行動ではないのですが、その言葉がいちいち突き刺さるということもあったり、あるいは子どもがだんだん大きくなってくれば子どもから自分は誰に似てる似てないという話にもなってくるかもしれない、そういうようなことでいろいろな子育ての悩みだとか告知について思いや心配が湧いてきます。それに対して自由に情報交換できる、それから生まれた子どもたちも連れてくるので、子ども同士の交流等をそこで担っています。どうぞ好きなようにお話しくださいということで勉強会とは違うスタイルでもう本当に輪になって話したいことを話してみたいな会なんですけれども、時には先輩ママとかパパを囲んでその方たちの体験を話してもらったり公園だとか遊園地だとか水族館に行って遊びながらそういう情報交換をしたりとか、あるいはこれは AID でお母さんになった方が自分の子どもに伝えるための紙芝居なんですけど、この紙芝居を使ってここに参加した子どもたちにあなたはどんな風に生まれたのよという話をしたりというようなこともやっています。

このような会なんですけれども、やはりまだまだ AID で親になった方たち、精子提供で親になった方たちの、なかなか生きづらい部分というのがあります。世の中に、あるいは医療者にどんなことを望みますかというようなことをお聞きすると、「親子関係の法整備をしてほしい」とか、あるいは助成金を、これは治療面ですね、「助成金を充実させてほしい」とか、あるいは「AID を受けられる施設を増やしてほしい」。実際いま AID をやっているという施設は公的には、12 施設しかありません。そういう意味では本当に治療を受けるだけでもとても大変な状況です。それから「AID を希望する人すべてに平等に病院の情報が公開されること」。なかなか先ほど言った 12 施設も積極的にやっているところと、ほとんどやってないところもあったりして、なかなかそういう施設にたどり着けない方たちも多いです。それから、「生まれた子どもが相談できる環境（場）が欲しい」とか、あるいは、「男性不妊医療の発展と正確な情報提供を期待する」。あるいは「子どもを望む家族のために一緒に考える医療機関があってほしい」、等がありました。また社会の認識に対しては、「AID



を実施していることをオープンにできる時代が来てほしい」、「保育園から高校までの教育者に対する AID の教育とサポートの周知をしてほしい」、「もっと多様性が当たり前、マイノリティーにやさしい社会になってほしい」というような希望もできました。以上で私の話は終わります。

柘植：はい、ありがとうございます。画面の共有を外していただけますか。これでギャラリービューで 4 人が写っている状態になります。では早速いろいろな質問とか感想とかお話しして教えていただきたいんですけども、まず、すまいる親の会を知ってここに参加しようという人たちはどこで知るんですか。

清水：すまいる親の会は HP を作ってまして、そこで勉強会の企画をしますとアップして、勉強会いついつやりますよっていう風にやって、そこで見た人たちがメールで参加登録してもらおうという形をとっています。

柘植：特に病院で、すまいる親の会というのがあるよという風に、医師の方が患者さんに伝えたりするようなことはないのでしょうか。

清水：参加の仕方は HP からなんですけど、今は医療者、医師もそれから看護師さんもカウンセラーの方もすまいる親の会のことを伝えてくれて、そこでも患者さんたちにお話はしてくださるんですけど、1 回そういうところに行ってみてもいいんじゃないっていうお話をしてくれているようで、かなり参加率は高くなってきています、参加率というんですかね、かなり参加者が多くなってきています。

柘植：ありがとうございます。あと、参加された方の感想でそれまで孤独だったんだけど、参加してみてよかったの中に、孤独感が軽くなったとか、軽減されたというようなご紹介がありましたけれども、ちょっと難しい質問になってしまいますが、どうして孤独なのかっていうか、やっぱりこの技術をするということが人に言えないということがまだ強いのでしょうか。

清水：そうですね、よく言われるのは、こういうつまり男性不妊の中でも無精子ということがとても自分たちはマイノリティーで、自分たちと同じような体験をしている人たちはいないんじゃないかという風に思っているようなんですね。特異な自分たちの体験だって思っている中でずっとこう、考えているので、他に誰かいますかとか、そういうようなアクションっていうのを出しにくいのかなって思います。インターネットがかなり出来てきてです

ね、結構自分で告知をしている人たちもだんだん出てきているので、私が調査したときとちょっとずつ違うのかもしれませんが、でもやっぱり生身で自分と同じ体験をしている人を見るというのは本当に初めて、私たちの会に来て思うみたいです。今ですね、実は20組くらいから参加されるんですね。大体100人の教室に結構いっぱいになるんですね。で、こんなに自分たちと同じ体験をしている人たちがいるんだっていうようなことを思われるようです。

柘植：参加される方はさっき説明の中にあつたように既にお子さんを持った方たち、このAIDとかで精子提供ですでお子さんを持った方たちとこれから持ちたい、やってみようかな、どうしようかなと迷っている人たちみんな色々なんですけれども、その人たちがお話しするのになんかこう、温度差があつたり理解の違いっていうのかな、情報の違いとかあつたりして、困ったりはしないんでしょうか。

清水：ありがとうございます。ちょっと私が説明が足りなかったと思うんですけど、実はすまいる親の会の方の勉強会はAIDを検討している人たちを対象にしています。この中ではやはり無精子症と分かったばかりの人もいれば、治療を前向きに考えている人、治療の土台に乗った人、中には妊娠している人もいるんですけど、大体そのくらいの方たちが来られます。それから、すまいるきつずは実はもう親になった人と子どもなので、そういう意味では分けができています。きつずの方がすまいるの勉強会に参加した親たちがそのまま、卒業後の会みたいな感じで集まっています。

柘植：ありがとうございます。お二人質問あればどうぞ

小門：じゃあ、質問させてください。AIDを考えるカップルの方に渡す情報提供のパンフレットがあるという、ご報告の中で言及されていましたが、どんな内容をお伝えしているんでしょうか。

清水：本当はAIDもいろんなことがありますけれども、とにかく初めてAIDをどうしようかなと考えているカップルへの情報提供資料になります。ですから、実際には3部くらいに分かれていて最初の1部はやはり体験者の気持ちですね。無精子だつてわかつたつていうところで青天の霹靂とか寝耳に水みたいな体験、そして、それに対して驚いていたり、怒っていたり、拒否をしたいと思つたり、あるいは夫の方は離婚つていう気持ちになつたり、あるいは妻のほうはこれが不妊の原因だつたのかとか、カップルでもいろいろな気持ちがあるし、それから、いろいろな体験をします。その中でも、AIDということを告げられて、

これを選んでいいのかとかといういろいろな気持ちになります。だから、本当にそういう気持ちになりますよというところ。当事者の気持ちを反映したものと、それからあと、すまいる親の会は先ほども言いましたけど、AID で親になった父親とか母親の立場で話してもらってるんですね。そういう体験を話してもらうのは1時間くらい、30分くらい話してもらうので長いんですけどそれをちょっとコンパクトにして、自分は男性不妊とこういう風に出会って、AID をこういう風を選択して、今子どもとこういう風に付き合っているみたいな。お話をしてもらってるんですが、それをコンパクトにしたものをそこに載せたりして、親の体験、それからあとは生まれた人の体験ですね。生まれた人の体験も載せていただいています。そういう当事者の体験、それから研究者の体験というところでは、実際に海外の情報だとか、それから日本の法的な情報だとか、それから、あとは裁判とか判例とか今どんなことが起こっているのかという風な日本の現状等載せたりしていますし、あと海外の AID で親になった人のコメントも載せていただいたりというようなこと、それから最後の方は日本産婦人科学会のデータであったり実際に AID をしている人の人数、生まれたお子さんの人数等載せていってます。ほんとうにコンパクトで分かるような内容になっています。

小門：はい、ありがとうございます。もし洪さんもあれば。

洪：ありがとうございます。貴重なお話ありがとうございます。質問は2問あって、まず、1つ目なんですけれども先ほど、すまいるきっずの会があるという風にお聞きしているんですが、このすまいるきっずの会の年齢層っていうのがどのくらいになっているのかっていうのと、あとは交流内容とかについても教えていただきたいなと思うんですね。というのは、このすまいる親の会はやっぱり親御さんのところに重きを置いているかと思うんですが、すまいるきっずの会だと交流の中から子どもの立場からの気持ちを親にどういう風にフィードバックしているのかそれともどのような形でこのすまいるきっずの会を位置付けて交流されているのかについて教えていただければと思います。2点目の質問なんですけれども、先ほど海外での提供の選択肢があるのが分かったというようなご意見があったかと思うんですけども、精子提供の場合に海外の選択肢っていうのはどういう部分でどのような情報提供があって、どのような方が選択されるのかが、少し気になりました。よろしく願いいたします。

清水：貴重なご質問ありがとうございます。1例目のすまいるきっずなんですけれども、実はここに来る子どもたちはだいたい就学前の子どもです。ほとんどが乳幼児だったり、少し大きいとほんとに、就学前の子たちもいます。その子たちが今は一同に介すので、ごちゃご

ちゃ、みたいな感じで、もうギャーギャーの中で、親がえーとかあーとかいって、親が情報交換したいという場になっています。また子どもたち同士がこのことのテーマについて、なんだろこんだろって言うような話はある興味がない、目の前の積み木だとか、おもちゃだとかがとても楽しくて、風船が楽しくってってというようなところで、遊びながら感じですが、

でもみんな紙芝居やるよとか言うともみんな聞いたりもしたりして、そんなようなところで、あんなこと聞いたなとか、だれだれちゃんと1年に1回や2回会うとか。そんなようなところで子どもは今残っているのかなっていうことですが、先ほど洪さんが言ってくださったようにもうちょっと大きくなるきつはずはそういうあり方ではなく、子ども主体になっていったりすることが必要なのかなっていう風に思っています。ただ、反面ですね、学校に入るとですね、学校のイベントとか、それから土日の家族イベントとかが入ってくるとですね、なかなか今度すまいるに來れなくなってくる、それからきつはずに來れなくなってくる。あるいはきつはずに來る必要がなくなってくるのかもしれませんが、そういうことで、ちょっと小学校くらいに入っている親子たちはちょっと遠のいているというのが現状です。答えになっていますでしょうか。それから2個目ですけれども海外情報というのは、すみません、ここだけだとほんと、何を言っているのか分からないですね。実は精子ドナーがとも今少なくなってきた、日本で公的に承認されている、日本産婦人科学会で承認されている12施設だけでもすごく実施できる数が少なくなっているのが現状で、なかなかそこでもかなりウェイティング期間があったりということで、そのウェイティング期間があることで、どうしてもしびれを切らしてしまっているカップルだとか、日本の中ではAIDといって人工授精レベルでの精子提供しか日本産婦人科学会は承認していないんですね。ですから、これは必ず、HIV等のウィンドウ・ピリオド期をちゃんと6か月保たなきゃいけないので、そういう意味では凍結精子を使うということでは妊娠率はすごく低いです。だいた2-3%ぐらいと言われています。ですから、やはりこの人工授精だけを繰り返して、20回も30回もやっているカップルもいるんですね。かなりウェイティング期間がありながら20回も30回もやっていると妊娠できる年齢を越してしまうというようなそういう心配もあって、そして、海外では体外受精等ができるところがあるんですね。そういうところの情報も実はAIDで親になった人の体験の中では自分はこうやって体外受精型の精子提供を受けたってというような、そういうご経験を話してくださる方もいますので、そういうところで自分たちもそういうことも考えれるんだなってというようなことでの感想でした。

柘植：ありがとうございます。私から質問させていただきたいんですが、今お話を聞いていると、その成功率もかなり低いし、それから通える病院が近くにある人はいいかも思いますが、すけれども、結構遠くまで通わないといけないという医療的な問題もあるかと思えます

し、それからもう一つは倫理的葛藤っていうのを、やる前、始めてからでもあるのかもしれないんですが、その倫理的葛藤っていうのも抱える、で相談するというようなこともありながらもこれを受ける。そして、今度妊娠したら子どもに知らせるのか、事実を知らせるのか、それからもし子どもが提供者を知りたいって言ったらかどうするのかみたいな、そういう悩みも抱えていると思うんですね。それに対してこういうグループがあるのはとても相談できたりしていいことだとは思いますがでもでもステージステージっていうかね、いろんな段階でいろんなサポートの違いがあると思うんですが、その辺をこの会では、もしくは清水さんはどんなことを注意されていますか。

清水：はい、最初はとにかく AID というキーワードだけで集まれる場所を作りました。でもやはり、このグループが長くやっていくと、やっぱり乳幼児のころと、まずはこの治療を選ぶか選ばないかというレベルの人だったり、それからあと実際には治療の土台に乗ったけどいろんな悩みをもっているとか、あるいは産んでから子育て等含めていろんな悩みを持つ、そしてお子さんの年齢にもよって、今柘植さんがおっしゃられるように色々な課題がある。今一括りにしていますからやっぱり、なんとなく今は介しているけど、すぐわなくなっていく風に思われてる方たちもいらっしゃいます。そういう意味では自助グループの限界かなって思ってますね、自分たちのニーズにあうグループを、また小さいグループを作っていくてもらって全然いいと思うし、実はすまいるの中じゃなくて他でおやりになっていただいてもすごくいいと思うし、もしそういう考えを持つんなら私で手伝えることは手伝いたいとも思っていて、そう意味ではその方たちを縛るというよりは、その方たちが本当にやりたいことをやりたい人たちとやっていただければいいかなと思って、実はこのすまいるは会員制でもなく、来る者拒まず去るもの追わずみたいなのもあって、そんなような活動をしています。ただほんとうに、色々な課題もあると思いますし、そこにきめ細やかに対応するためには、やはりまたその人たちの体験を積み重ねていくということは今後に必要なようになってくるなという風に思っております。

柘植：ちょっと話が変わりますけれども、Telling、つまり子どもに事実、AID で生まれたんだよとか、もしくは精子提供による体外受精で、海外などで生まれたんだよ、妊娠したんだよっていうことを説明していくっていう段階とそれから子どもがもうちょっとそれを理解できるようになって自分の遺伝的なルーツみたいなのか、あともしかしたら、提供者はどんな気持ちで提供してくれたのかとか、そういうことを知りたいっていう人も今後出てくる可能性はありますよね。日本の場合清水さんおっしゃったように、秘密にしておくのがいいんだよ、子どもにとって一番いいんだよっていうのがずっと長く続いてきたので提供者について知りたいっていうのは難しいことがあると思うんですが、そういうの、清水

さん海外のことも調査されたようなんですけれども、どういう方向がいいのかなっていうこと、いろいろ文化や制度によって違うと思いますけれども、どんなふうになったらいいのかなって、思っただけじゃ聞かせてもらえますか。

清水：はい、ありがとうございます。ご存知のように年末に親子法を規定するような提供精子を望んだひとが父親でとか、生んだ母親が母親でとか、そういうところでこの先どうなるのかわからないんですけれども、子どもがやっぱりこのドナーを知りたいとか、それからあと医療情報や遺伝情報を知りたいとかっていうときには、やはりそれをちゃんと伝えられる社会になっていかなきゃいけないのかなっていうのはすごく思っています。これはやっぱり、生まれたお子さんたちがそれが叶わない故に、それをすごくアイデンティティ・クライシスを起こしたり、本当に自分の病気に対してどうやってに対応したらいいのかわからないというような大変な思いをされているというのもお聞きしますので、生まれてきたお子さんが不幸になるようなことはやってはいけないってすごく思っています。そのために、やっぱりすまいる親の会も生まれたお子さんには幸せになってもらえるために何ができるかなっていうことを考えていきたい。で、その一つとして、出自を知る権利というのがもし日本の中で法律だとか制度等で決まるようであれば活動していきたいと思ったり、それからもし、その前に生まれた人たちですね、前に生まれた人たちは基本匿名ということで、前提で親たちは治療を受けていますから、そういう人たちにはアメリカのようなドナーシブリングレジストリーというような活動で、

柘植：自発的な、

清水：そうですね、自発的なドナーだとかそれからあるいは、親だとかそれから生まれた子どもたちが、

柘植：同じ提供者から生まれたっていう人たちですね

清水：そうですね、それで知らせていいよとかここまでなら伝えてもいいよっていうドナーたちが、自発的にそういう風にしてもらって、子どもたちに伝えていけるというような制度ができるといいなっていう風には思っています。

柘植：そうなるにはやっぱり、親が子どもに少なくとも事実を伝えるって先ほど清水さんがおっしゃった Telling っていうところが、大事になると思うんですが、そういう Telling に対してのサポートみたいなのは何かお考えですか。

清水：そうですね、最後の方にもちょっとお伝えさせていただきましたけど、やはり、親が自分のすごく心配なことだとか懸念することを抱えたまま AID を受けて、そして子どもを授かってとなるとその緊張感がそのまま家族にも影響するし、それからその中にはやはり子どもに伝えられないという気持ちが強ければ、本当に子どもにはまず伝わらないですよ。そこがすごく問題かなって思っています。まず親がちゃんと肯定的に、まずは自分と彼のこどもが欲しかったらう、本当は欲しかったと思うんです。なんだけど、そこはもう断念してただけど提供をうけて、そして家族になるということをきちんと自分たちの親子のありかたを切り替えて、そして、その中でも幸せになるためにはどうしたらいいのかということもきちんと情報提供を受けて、それを子どもにある意味伝えていくことがすごく大切っていう風に思っていたら、それを支えるような周りのありかたですね。先ほどもいったように専門的な知識とそれから周りの支えがちゃんとなければ、やっぱり子どもにちゃんと向かい合うことができないというところの部分で、その親を支えるシステムっていうのが必要かなって思います。ただ、ここは強制するところではないんですけど、でもここがきちんと手厚くなると子どもに伝えることはそんな苦なことではないというようなことも実は Telling している親たちがいま自分たちの体験を語り始めているんですけども、すくなかなか人生にとって大変なことをしなきゃいけないみたいなぐらいの気持ちになっているかもしれないけれども、結構伝えてみると子どもはそのまま受け取ってくれてるよっていうような体験を実は親たちはしていますから、そういうようなことを知っているのも、大きな支援になるのかなとも思います。

柘植：そういう体験をした方が、これからの方に話していくっていうと、すごく選択は人それぞれだと思うんですが、話し方とか人それぞれだと思うんですけども、すごく参考になりますよね。

清水：そうですね。こんなケースで話したよ、こんな風にやったよっていうところを色々聞ければ、自分たちはこういうことならできるかなって考えられるかなって思うんですね。

柘植：それを伝えてくださる親になった方たちの勇気というか、同じような状況にある人に伝えようっていう勇気っていうのが、すごく嬉しいですよ。

清水：そうですね。本当に感謝なんですけど、実はすまいるおやの会に参加して本当にしんどい気持ちが、少し参加することで楽になった。そして、自分たちはこの AID で生まれたお子さんたちのことを聞いて、あ、子どもに本当に告知しなきゃいけないと思った。そして

こんな風にやったっていうことを少しずつ知識として私たち積み重ねることが今できているので、そういうことでは私たちの会はそこら辺がある意味残ってくれたスタッフたちに感謝ですし、この人たちが伝えてくれることで後に来る人たちが、少し楽になるっていうような循環ができてるかなって思っています。

柘植：それは長く続けてきたこともすごく役に立っているというか、長く続けたからこそ、できることだなって思います。そろそろ時間が限られてきたんですが、お二人 1 問くらいずつはまだ質問していただけたらと思います。どうぞ。

小門：じゃ、1つ質問させてください。途中で中ごろに見せてくださったスライドで、不安なことについて参加者の方が答えてらっしゃるところで、生まれてくる子の容姿が不安っていう項目があって、それが女性の方は確か半数を超えていたけど、不安って答えた方が半数を超えていたけど、男性はそこまで多くなかったのは、すごく印象に残っていて、この容姿が不安っていうのは、意味としてはその自分たちに似ている似ていないを気にしているということなんですかね。これはどういうこと、ここについてもうちょっと詳しく知りたいなと思いました。

清水：そうですね、すみません、これもアンケートで取ったので、ここまでしか分からないんですね。だけど面白いですよ。女の人の方がかなり気にしているみたいな、自分の半分は子どもに行くのについていうところで、まったく父親の方が分からないという気持ちになっているだろうにとは思いますが、こんな風に出ていますね。ただ正直に考えて、答えてくれたのかなとも思うんですね。やっぱり AID って全く匿名の精子、血液型だけを合わせて提供を受けていますから、そういう意味では半分が分からないって正直な気持ちどんな子どもが生まれてくるんだろうって、私だってきつと思うなとか思ったときに正直に答えてくれたのかな、なんていう風に思っています。なんていうのかな、今度はちゃんと聞いてみますね。

小門：非常に、すごく面白い結果がたくさんあってすごく見せていただいて勉強になりました。ありがとうございます。

洪：ありがとうございます。多分、今日非常に貴重な内容がたくさんあって、最後に一つっていうのは難しいんですが、先ほどの参加者が出されたご意見の中で、子どもが生まれてよかったと思うことがゴールなんだっていうのを非常に印象深く思いました。これは、多分生殖補助医療で生まれたお子さんのみならず、普遍的に、親子関係における普遍的なことなの



かなっていう風にも思っています。HPにも事例とかが紹介されていて非常に印象深く読ませていただいたんですが、最後にこういう、すまいる親の会でご活動されていて非常によかった事例というか、そういうのがあれば、ご紹介していただけるとありがたいです。よろしくお願いたします。

清水：いま洪さんの良かった事例っていうのは親子関係において、それとも Telling とか

洪：Telling もそうですし、あとは事務局として支える側として非常にいろんな事例を見てこられたと思うんですが、その中で、こういうサポートをしていて、よかった、一番印象に残る Telling であれば参加者のいろんな側面での事例であれ、印象に残ったもの支えてよかったと思われるような良い事例があればご紹介いただければ。

清水：私も実は線の繋がりではなくって、こういう勉強会の時にお会いする継続的に来てくださる方はスタッフになるのですが、だいたい1回2回のかかわりなので、なかなかこの人たちが最後どういう選択をされたのかも分からないんですけども、でも、やっぱり無精子症だということを直面して、そして AID というある意味なかなか理解、なかなか自分自身も咀嚼ができないような、選択ならあるよとか、あるいは養子縁組ということでそれも多分大変な選択だと思うんですね。そういうようなところ、それから二人で生きるというような、そういうようなことを抱えながら、ほんとうにどうしたらいいんだろうっていう気持ちで来られている方たちが、ちょっとこうね、元気になって帰って行かれるところを見るとやってよかったのかなっていう風に思っています。今本当はコロナ禍で実はすまいる親の会も年に2回の4-50人集まる会ができてないんですね。で、リモートでやっているんですけども、リモートはやっぱり10組入るのが精一杯なんです。1日、だいたい2日くらい告知して、勉強会ありますって告知して、大体2日で10組埋まっちゃうんですね。そのくらい心待ちにしているのかなっていうのを思うとですね、時々この会運営するの疲れちゃうなってこともあるんだけど、「あ、続けなきゃいけないな」ってすごく思っています。私は本当にこういう大卒のところをやらせていただいているんですけど、やっぱり、スタッフになってくださっている、ちょっと先行くお父さんやお母さんになった人、それから治療を続けている方たちが講師になり、フリートークのファシリテーターになりというようなことをやっていただいで、その関係からも私はすごく学ぶことがあって。患者さんが学ぶこと、当事者から学ぶことというのは本当にたくさんあるなというのはいつも感じていることなんですけど、そこから学ばせていただいているっていうこともすごく感謝で、やってよかったなって思っています。

柘植：はい、とてもいいところになってきたんですが、そろそろ時間になるので、でも今後  
も本当にいろいろ教えてください。どうぞよろしくお願いします。今日は本当にありがとう  
ございました。

小門：ありがとうございました。

清水：ありがとうございました。